

①線画を描く。漉きあがって枠に入ったままの濡れた和紙に、針金の曲がった部分を押しつけるようにして引く。作業中水は下に垂れ続ける

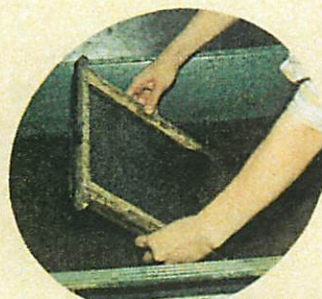


不器用でも素朴で味わいのある作品が誕生

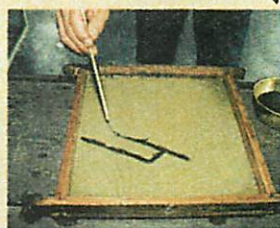
漉き絵

「漉き絵」と聞いてもなんだかよくわからなかったが、ようするに和紙の上に和紙で描く絵のこと。キャンバスは薄茶色の地の紙、絵の具は紙に漉く前の、楮の繊維を水に溶かした、言ってみれば色のついた「和紙の素」、筆は先の曲がった針金とスポイト。

描くというよりは、絵や模様をついた和紙を作る、といった感じ。工芸品を自分で作る、という喜びに加えて、絵心がなくてもだれでも気軽に楽しめるのがいい。地になる和紙を均一の薄さに漉くほうが難しいが、これはたいてい作っておいてくれる。時期によって、希望すれば紙漉きの工程からできることもあるので、予約するときに尋ねてみよう。所要時間は、和紙に関する話や説明を含めて2時間。要予約。



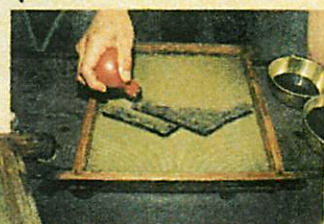
②輪郭に色をつける。ドロドロした水溶性繊維を針金に引っ掛け、線に沿って置く。線の内側から置いてゆき、線の上で針金を押しつけて抜くようにすると、輪郭がボサボサにならず、はっきりする。細い線を作るときは、指をこすり合わせて繊維を針金に巻きつけるようにする



③塗る。広い部分はスポイトを使って繊維を広げる。隣の色と混ざらないよう色どめをしてあるし、上から地の色を重ねれば「紙」に戻るなので、心配は無用



④乾かす。2～3日で完全に乾いたら枠からはずし、色紙大に装丁して完成。10日ほどで手元に届く



奥久慈の和紙 西の内和紙

奥久慈は、楮の3大産地の1つに数えられている。良質の楮と久慈川の清流にはぐくまれ、佐竹氏の昔から変わらぬ手法で作られてきた。水戸光圀が地名をとって西の内和紙と命名し、『大日本史』の編纂用紙に用いるなど、昔からその丈夫さと品質の高さには定評があった。近年は、壁紙やインテリアに用いられるなど、その用途も広がってきた。



◀和紙の原料となる植物、楮のいろいろ

▶紙に漉く前の楮の繊維



▲漉き絵の着色繊維は微妙な色合い



■紙のさと和紙資料館

☎0295-57-2252

山方町舟生90

水郡線中舟生駅から徒歩5分。

◎9:00～17:00 ◎水曜日

◎1000円

実際の紙漉きに使われる道具や世界の紙が展示され、漉き絵の体験や押し絵教室などが開かれている資料館のほか、民芸館(和紙民芸品の売店)がある。「紙のさと」はもともと生産元で、工場では職人さんたちが毎日手作業で紙を漉いている。

現在、茨城県に残る手漉き和紙の生産元は3軒だけで、西の内和紙の紙漉きは県と国の無形文化財に指定されている。